

肺がんの免疫療法

～ノーベル賞受賞研究がもたらした衝撃と課題～

山口 泰弘

肺がんの治療はまさに日進月歩です。免疫療法もその一つで、がんの他の薬とは全く違う方法で、がんを抑える治療です。この進歩の基礎になった研究が、本庶祐先生がノーベル賞を受賞した「免疫チェックポイント阻害因子の発見とがん治療への応用」です。

免疫というのは、わかりやすく言うと、自分の体以外のもの（異物）を退治して取り除くことです。しかし、自分の体と自分以外のものを正確に区別し続けるのは簡単でなく、ヒトの免疫は、異物を攻撃するばかりでなく、同時に、攻撃にブレーキをかける役割もあることがわかってきました。この攻撃と防御のバランスで、適切な免疫が働いているわけです。自動車にアクセルとブレーキがついていることに似ています。本庶先生の発見した物質は、このブレーキの役割をする物質です。

ところが、一部のがんは、このバランスを悪用し、ブレーキ物質で体の免疫細胞にブレーキをかけて、自身を防御しながら大きくなっています。新しく登場した免疫チェックポイント阻害剤は、このブレーキを解除する薬です。それによって、がんは、免疫系に対する防御を失って成長を抑えられるわけです。

実際に肺癌にこれらの薬が使用されるようになり、その効果や副作用についてのデータが揃ってきました。ポイントとして

- ・同じ肺癌でも免疫チェックポイント阻害剤のよく効く患者さんと効かない患者さんがいます。どのような患者さんに効くかを確実に予測できる指標はまだありません。
- ・ごく一部のケースで、免疫チェックポイント阻害剤が何年にもわたって効きつづけます。
- ・副作用は、他の抗癌剤と全く違います。免疫のブレーキを解除することで、肺や消化器、内分泌、皮膚などに、自己免疫（自分自身を異物と勘違いして免疫系が攻撃してしまうこと）による副作用の出ることがあります。

免疫チェックポイント阻害剤が決して夢の薬ではないことも大切な事実です。我々の施設では、免疫チェックポイント阻害剤の適応のある患者さんには、本治療を提案し、多くの症例で実施しています。加えて、薬剤部とも連携して、副作用の早期発見とその対策にも力をいれています。がんと闘える”元気“がないときや、副作用の出やすい合併症のあるときには、無理な治療は逆効果です。そういうことを十分に話し合うことも大切なことです。